

## 日本語のあいづちについて

### ——あいづちから見る日本国民性考察と今の課題——

ID No. 170087 テン・モイ

#### 1.はじめに

日本語の会話であいづちが使われる頻度は高い。他の言語のあいづちに比べ、日本語のあいづちは日常会話でより頻繁に見る。人々がお互いの様子を見て応答する行為は物事を順調に進めるための不可欠な行動だと言えるが、日本語の会話の中で言葉によるあいづちが極めて多く存在し、それが日本文化の一つの特徴だと考えられる。

ここ数年、経済活動により、緊密に繋がっている国々で国境を越えた様々な変化が起きた。このグローバル化と呼ばれる現象は世界の異なる文化を大幅に広げ、その中で日本人気質もより多くの外国人に知られるようになった。日本の特徴の一つとして、あいづちも自然に人々に認識されている。外国人と交流する際、日本人が慣れ親しんでいるあいづちの仕方はときに助けになったり、ときに邪魔になったりすることがある。そこで、日本語のあいづちはどんな特徴があるのか、日本人はなぜ様々なあいづちをよく用いるのか、また、この特性は日本のどのような国民性を表しているのか、そして、今後グローバル化した世界で生き残るためにどんな影響があるのかということについて検討する。

調査方法として、本、論文集やウェブサイトのほか、江戸東京博物館<sup>i</sup>と国立国語研究所<sup>ii</sup>の図書館で日本語に含まれている文化と国民性に関する資料も参考にした。以下、調べてわかったことについて述べ、考察を加える。

## 2.調査結果と考察

以下では、日本語のあいづちの特徴を明らかにした上で、あいづちが人々の会話で果たす効果、あいづちから考察できる日本人の国民性と、その特徴がグローバル化の世界で日本人が外国人と交流する際の効果を生んだり、あるいは障害になったりすることについて考察する。

### 2-1.日本語におけるあいづちの特徴

久保田（2001）によると、漢字で「相槌」と書く「あいづち」の語源は「鍛冶屋の師弟が互いに鎚をもって鉄を鍛えるために『カッチン、カッチン』と打つこと（p.2）」にあって、「そこから人が話している時に聞き手が相手に調子を合わせてうなずいたり、『ええ、ええ』などと『あいづちを打つ』ことを示す（p.2）」ようになったのである。つまり、あいづちは言葉だけではなく、うなづくことのような動きも含んでいる。さらに、水谷（1983）は合計時間 34 分 15 秒の座談会、テレビ対談とラジオ番組を分析し、総計 44 種類、602 回のあいづちを聞き取った。この調査から日本語における言葉のあいづちの種類の高さと使用頻度の高さがわかる。

---

<sup>i</sup> 江戸東京博物館は東京都墨田区横綱にある東京都立の博物館である。江戸時代から現代までの東京の歴史と文化に関する様々なものをテーマ別に展示し、地域における社会の移り変わりを紹介している。

<sup>ii</sup> 国立国語研究所は東京都立川市緑町 10 番地の 2 にあり、主に日本語学、言語学・日本語教育について調査し研究する機関である。

その上、英語のように話し手と聞き手が明白に分けられる会話の形と違い、日本語における特色のあいづちの形がある。水谷（1983）は日本語でよく見かける「聞き手が相手の話をひきとって、代わりに自分がものを言う（p.42）」という現象から、「互いに相手の話を完結し合う関係（p.43）」で成立した会話を示す「共話」型という新しい名詞を作った。つまり、日本人の会話で時々聞き手は自分の理解の上で聞いた話の続きを予想して言い出し、話し手と協力して一句を完成するのである。これも日本語のあいづちの一つの表現形式である。

陳（2002）は日本語のあいづちと中国語、英語のあいづちの調査を比べ、日本語のあいづちは「英語や中国語と比べて頻繁であることが伺える（p.227）」と述べている。英語と中国語はあくまでも二つの言語の例しかなく、日本語のあいづちは全ての言語より上回るとは言えないが、世界で広く使われている西洋と東洋のこの二つの言語と比べ、あいづちは日本語の特徴の一つだと言えるのではないか。

## 2-2. あいづちを使う理由と効用

なぜ、日本人はよくあいづちを使うのか。水谷（1983）は「話す人が話しやすいように、話の進行を助けるため（p.42）」あいづちを使うと指摘している。日本人だけではなく、世界中の人々もこの理由であいづちを使っていると言えるだろう。しかし、日本の場合では、特に社会的に人間関係を重視する背景があり、それがさらにあいづちの使用を拡大した。久保田（2001）は日本人同士が話をする時、話の内容より、会話で表したその場の互いの関係に配慮すると主張している。ここから違うあいづちの場合によって打つことは日本人の常に雰囲気から状況を推察するという文化の一つの表現だということが読み取れる。

植野（2011）は言葉のあいづちも動きのあいづちも「語りを受ける聞き手として好意的な行為であり、円滑なコミュニケーションを成立させるものであるが、その選択は相手との社会

的關係によって影響を受け、調整されることが示された (p.66) 」と結論づけている。植野 (2011) の研究の結果によると、日本人は目上の相手に対してうなずきを使うのが多いが、親しい相手と話す時に逆に言葉のあいづちをよく用いるそうだ。その原因として、目上の人と交流する時うなずきのような反応が相手の話の邪魔にならず、より深く尊敬の態度が表されるということが考えられる。

### 2-3.日本人の国民性

あいづちは人間関係に配慮した上の産物なら、日本人に求められている人間関係はどんな形をし、日本人のどういう特徴を表しているのか。久保田 (2001) によると「甘え」と「縦関係」が基礎となる「なる・ある」という日本文化では、人が年を取るほど知識と経験が豊富になると社会に思われ権威を持つようになるということだ。この「甘え」とは他人に好かれ依存できるようになりたいという人の好意をあてにする気持ちである。そして、「縦関係」という言葉は「上下関係」と同じ意味で、上の地位にいる者に権利を与え、社会が縦の形で分断されていることだ。つまり、日本では年長者が年をとる中で自然に社会の上位者になり、より多い発言権を持つようになるというわけである。

「人間関係」に気をつけるから、日本人は論理性より感情に偏る傾向がある。久保田 (2001) は日本人が会話をする時できるだけ丁寧に会話を楽しめるものにしようと努めており、そのため「関係」面のことを捉えがちで、会話の内容に反対されたら人格への攻撃だと感じやすいと指摘している。同じようにグレコリー・クラーク (1990) は日本人が元々「はっきりものを言わない民族で (p.202) 」、個人より集団を優先し、合理性に全てを任せるより「人間関係を重視する情緒的または感性的な面 (p.105) 」を持っていると述べている。だから、日本人の会話と行動は社会関係に影響されやすいと考えられる。人と接触する時常に他人

のことを配慮し、雰囲気に関心を持ち、好意と優しさを示すことを大切にするのは日本人の特徴だと言えるだろう。このような文化背景で日本の特別な「あいづち」が生まれた。

#### 2-4. グローバル化世界での現状

国々が緊密に繋がっている現在、日本は英語圏の文化と接触する機会が増えてきた。この際、日本の特色の文化は日本が世界の舞台に出る時、ときに助けになったり、ときに交流の障壁になったりする。

では、日本文化はどのように役に立ったのか。西山（1972）によると日本は人間関係を重視し異文化の人に良い印象を与えやすいため、その日本人と話した外国人も会話の時できるだけ日本人のことを理解しようと努力しているらしい。自分の文化を世界にアピールする時、まず外国人に関心を持たせることが必要だ。会話する時の優しい雰囲気は日本人に外国人が丁寧に自分のことを聞いてくれるチャンスを与えたと言えるだろう。そして、グレコリー・クラーク（1990）は日本が本来人間関係を基盤とした人を重視する社会だから、現在さらに外来の合理主義を加え、人の感情と合理的な思考を調和的に組み合わせる最もいい形ができていると述べている。合理性を求めることが世界の大勢になっている今、西洋社会のように何もかも論理性に頼るのではなく、きちんと科学の長所と短所を認識し、論理と感情のバランスを取れるのは、元々人間性を重視していた日本ならではだとみられる。

しかし、あいづちが多いこととそこから伝わった善意が決して完璧ではない。大塚（2007）によると日本人が英語の会話をする時、日本語の共話型展開をそのまま英語に持ち込み、単に言葉の短いあいづちを打ったり頭がうなずいたりしがちで、それは積極的に自分の発想を話に持ち込むことだけが会話に参加している証拠だと認めている西洋人にとって、反応がない、喋らない、あるいは会話に参加していないと解釈されているようだ。ここから各言

語の会話での反応の仕方と話の展開方法が違うということがわかる。日本人が真剣に会話に参加しようとも、外国人は日本人の一生懸命のあいづちを捉えず、参加する気がないと判断する。会話の雰囲気より話の内容と個人主張を重視している英語の会話であいづちはあまり話を進めるといった効果が出せないとみられる。

さらに、感情を政治に持ち込むことによって日本は誤解された。グレコリー・クラーク (1990) は「国にとって友情は永遠ではない、永遠なのは国益だけ (p.157)」だという原則に基づき、外交の時冷徹な合理主義を貫く世界政治界で日本の政治家の「心と心の触れ合い」のような現実的、具体的ではない発言は日本が誠意を持たず、完全な偽善主義だと思われていたと述べている。「甘え」は日本の基礎文化だが、政治界で文化は言い訳にならない。政治上で世界の大勢である合理主義に従わないと、他の国に理解されず、損になるのは自国の世界での信頼と利益だと言ってよい。

### 3.最後に

以上、日本語におけるあいづちの特徴、あいづちを使う理由と効用、あいづちから考察できる日本人の国民性と日本がグローバル化世界の舞台に出る時の現状について見てきた。日本語のあいづちは他の言語に比べ種類と使用回数が多く、場合によって打つ方法が違い、さらに日本語の「共話型」という特徴を表している。あいづちは日本語の特徴の一つだと言えるだろう。会話を順調に進めるためだけでなく、日本語であいづちを打つことは人間関係を配慮している表現でもある。日本社会は「縦関係」で建てられており、つまり年をとるほど社会的地位とそれなりの発言権が高くなる。故に、人間関係を重視する日本文化は他の国より感性的だと考えられる。グローバル化世界で表した利点は異文化者によい印象を与え、そして合理性に囲まれた他の国と違い、合理と感情を結びつけることである。その反対に、言語の構成が違う

ため日本語のあいづちは西洋言語の会話で通じず、外国人と英語で話し合う時、両方とも楽しくなる会話を達成するのが難しいと思われる。その上、日本の政治家が世界政治の合理主義に慣れ、誤解されやすい感性的な発言に注意し、うまく自国の利益を守ることがこれからの課題であろう。

## 参考文献

### ①書籍

久保田真弓（2001）『「あいづち」は人を活かす』廣済堂出版

西山千（1972）『誤解と理解』サイマル出版会

クレコリー・クラーク（1990）『誤解される日本人』講談社

### ②論文

植野貴志子（2011）「聞き手行動の社会言語学的考察——語りに対する聞き手の働きかけ」

社会言語科学会第28回大会（2011年9月18日）

大塚容子（2007）「日本語のあいづちは異文化でどのように解釈されるのか——会話の展開

方法の観点から」『異文化のクロスロード：文学・文化・言語』2007年1月

木村有伸（2009）「日本人の「国際化」議論における日本特殊性の信念—その内容と問題

点」『立命館国際研究』22-1、2009年6月

陳姿菁（2002）「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望（第4章会話研究と日本

語教育）」『言語文化と日本語教育』2002年5月特集号

水谷信子（1983）「あいづちと応答」『話しことばの表現』1983年9月27日、筑摩書房

③ちらし・パンフレットなど

「江戸東京博物館パンフレット」(2017年)

④講義

加藤恵理「多文化社会を生きる」東洋学園大学(2017年7月30日)